

障害児の遊戯療法過程

A Play Therapy Approach in the Treatment for Children with Disabilities

中 島 暢 美

キーワード：発達障害、情緒障害、遊戯療法、身体を通した関わり

Key Words: developmental disorder, emotional disturbance, play therapy, through-the-body approach

要 約

本事例は、鑑別困難例の典型と思われる障害児に対する遊戯療法過程である。心理臨床的立場から以下の目的の研究とする。第1に、遊戯療法過程を可能な限りアクチュアルに描出する。第2に、対象児に対する遊戯療法について考察する。約2年間の遊戯療法過程において、対象児はぬいぐるみ、パペットと描画を媒介として内界を表出し、身体を通した自己受容が成され精神的安定を得たと思われる。その結果、対象児の問題行動は軽減した。

ABSTRACT

This case study reports the process of a play therapy for a child with a disability, which is typically difficult to diagnose. The study was carried out for the following goals from the viewpoint of clinical psychology. First, the author described the play therapy process in as much detail as possible. Second, the author examined the meaning and results of the play therapy for this child. Through the process of the play therapy for approximately two years, the client came to express his inner world with the medium of stuffed animals and puppets and painting. It seemed that he established self-acceptance through the body so that he achieved internal stability. As a result, his problematic behavior was reduced and his maladjustment has improved.

I. 問題と目的

1. 子どもの障害^(注1)をめぐる問題

一般的には、普通児とは平均的・標準的な子ども、障害児とはそうではない子どもとされている。しかし平均的とする場合でも、そこには理想的、規範的、社会通念的拘束が在り、時として意味するものが異なり混乱が生じる。また標準的とする場合でも、文化や慣習を含有する社会における標準である為、社会の仕組みにより相違が生じる。更に普通児と障害児の扱いには、計量可能な身体的特性にも増して複雑微妙な心理的特性においては慎重さが求められるこ

とはいうまでもない。

精神医学においては、障害は原因による明確な区分けができないと考えられるようになってきている（杉山，2009）。障害は古典的には、脳異常が認められる外因性障害、遺伝的要因とされる内因性障害、環境的要因による心因性障害の3分類とされてきた。これらに台頭したのが脳の器質的病変の結果生じる器質性障害と、器質性ではない機能的障害の2分類である。しかし、複数の要素が重なり原因的に作用している可能性、多因子の原因や原因不明の場合もある。原因、症状や経過の異なる数多い障害の臨床的分類には様々な立場があるが、本邦では、ICD-10（2008）およびDSM-IV-TR（2003）が普及し、いずれかで示された定義や規準に従い診断されることが多い。

近年、発達障害と診断される子どもが急増している（読売新聞，2010年10月19日）。杉山（2009）は「発達障害が注目され、情緒障害が見過ごされている」と指摘する。

情緒障害は、ICD-10（2008）では、幼児期から青年期に発症する情緒や行動の障害に分類される。病名としては、分離不安障害、恐怖性不安障害、選択性緘黙、反応性愛着障害、チック障害等があげられる。原因論的立場からは何らかの心因・情緒因に基づくもの、症状論的立場からは症状に情緒面の問題を有するものとされ、医学、教育や福祉領域で多様に用いられる障害概念である。たとえば医学的見地からは、発達全般に歪みを有し多動等の対人関係の困難を示す状態とされている。教育的見地からは、環境的要因により過緊張等の社会適応の困難を示す状態の他に、不登校、いじめや虐待等による心的外傷も含まれる。症状や問題行動は、対象の心理・情緒的葛藤の産物であると同時に、背景には家族関係や社会的影響が包含される（氏原ら編，1999）。このように、その適応範囲は器質的・先天的要因が関与する障害から心因に起因する心身症状にまで及び一定の概念規定はなかった。しかし現在は、生育過程における何らかの原因によって精神発達および知的発達が遅れた状態とされ、器質的・先天的障害とされる発達障害と区別される動向にある。

発達障害は、幼児期から青年期に診断されることが多いが、成人でも幼少期に発症した場合はそれと認められる。器質的・先天的要因から心因に起因する心身症状まで含まれ、言語、学習、自己管理、生活等の能力において機能上の制限が存在し、その状態がいつまで続くか予想不可能であるものとされている。精神遅滞、学習障害、発達性協調運動障害、コミュニケーション障害、広汎性発達障害、自閉性障害、アスペルガー障害、レット障害、注意欠陥・多動障害、行動障害の他にも捕食・節食障害、排泄障害、チック障害が含まれる。精神遅滞児の場合、周囲から特異な取り扱いを受けることにより情緒障害をひき起こし、二次的な情緒障害が一次的な精神遅滞の不適応を一層深め固着化するという指摘がある（昇地，1965）。

発達障害に含まれるアスペルガー障害は、ICD-10（2008）では心理的発達の障害、DSM-IV-TR（2003）では幼児期から青年期に初めて診断される障害に分類されている。3歳以降に自閉症兆候が見られるも、発達するにつれて目立たなくなる自閉症の類縁障害とされる。言語コ

コミュニケーションの障害が軽微で、大多数がIQ70以上の高機能を占め、広汎性発達障害の中でも自閉症に並ぶ最大のグループとされる。広汎性発達障害の対人関係の障害の基本は感情を内的な状態として捉えることができない感情認知障害である。特徴としては、マイペースで介入を拒否し、関わりが一方的で友人関係を作ることに関心を示さず、楽しみを他人と共有せず、状況に応じて融通が利かない等がある（杉山ら、1999）。中核症状である社会性の障害は重く、社会的自立に大きな問題を持つとされる。

情緒障害と発達障害は使用される場面や場所で定義が異なる。

厚生労働省は、「発達障害者支援法施行令第一条」（平成十七年四月一日厚生労働省令第八十一号）で、「心理的発達の障害並びに行動及び情緒の障害（自閉症、アスペルガー症候群その他の広汎性発達障害、学習障害、注意欠陥多動性障害、言語の障害及び協調運動の障害を除く。）とする」と定めている^{（注2）}。一方、文部科学省は、「通級による指導の対象とすることが適当な自閉症者、情緒障害者、学習障害者又は注意欠陥多動性障害者に該当する児童生徒について（通知）」（平成十八年三月三十一日十七文科初第一一七八号）で、「通級による指導の対象となる情緒障害者」を、自閉症者、情緒障害者、学習障害者、注意欠陥多動性障害者と定めている^{（注3）}。「情緒の障害」は対人関係において情緒不安定になるもの全般を指し、心因・情緒因に基づくもののみならず中枢神経系の機能障害も含まれる。そして、「情緒障害者」が対象となる特別支援学級では、アスペルガー障害等の広汎性発達障害が多数を占めている。

医療・臨床の現場では、強迫・固執傾向が観られる場合、広汎性発達障害や自閉症を念頭に置き、精神遅滞と併記するのが最近の傾向とされる。また、精神遅滞で言語理解、意味理解、社会適応等の能力が極端に低い場合、情緒障害と判定されることがある。

以上のように、情緒障害も発達障害も、器質的・先天的要因と環境要因が複雑に影響し合い、発達障害の一部は情緒障害と同様の特徴があり、両者は重なり合って生じることが多く、その鑑別は非常に困難とされているのが現状である（杉山、2009）。

2. 事例の概要

本論文では、鑑別困難例の典型と思われる一事例を取り上げる。その概要は以下のとおりである。対象児の診断等の変遷は表1に示した。

対象児：養護学校小学部2年生（8歳）男児

家族構成：母親、小学校1年生の妹

生育歴と来談まで：母子家庭で生活保護を受給中。父親20歳、母親19歳で結婚し対象児を出産。父親は友人と自宅で夜中まで騒いだり気分による落差が激しく、対象児が泣くと「うるさい」「お座り」と怒鳴ったり、つねったり、叩いたりする等の暴言暴力があった。また、夫婦喧嘩も絶えなかった。家庭環境や子育て方針の違いから別居（対象児2歳）し、離婚成立（対象児

3歳)。対象児は1.5歳でつかまり立ち、1.7歳で歩行。発語は少なく3歳頃に話ようになる。落ち着きなく、保育園1年目(3.5歳)で集団行動を嫌がり、精神科aクリニックで「心の傷」と診断される。4歳時には、児童相談所で「軽度精神遅滞を伴う心因性情緒障害」と判定される。情緒障害児学級へ週1回通い、個別遊戯療法を年1回受けた(4～6歳)。小学校(情緒障害児学級)に入学し、母親が1ヵ月間付き添い、一人で過ごせるようになるが、担任教諭(男性)の指導方針が躰に重点を置いたことに馴染めず、風邪をきっかけに2学期から不登校になる。同年10月に児童相談所の勧めで施設入所するが、母親が精神的不安定になり連れ戻す。翌年4月養護学校小学部に転入。始業式で拒否反応を示し、その後も校門で暴れ、スクールバスに乗らず、母親が登校を促すとパニックになる。現在は母親に学校に連れて行かれるのを避けるため、母方実家で祖父母、伯父と暮らす。ぬいぐるみで遊んだり、絵を描いたり、ピアノを弾いたり、ビデオを観たりしている。担任教諭(男性)の家庭訪問では身体接触や登校刺激に拒絶反応を示す。同年5月児童相談所で「中度精神遅滞を伴う心因性情緒障害」と判定され、再び施設入所を勧められる。母親は判定結果や対応に激怒し強い不信感を抱き、養護学校の勧めにより筆者が所属していたH大学附属障害児実践センターに来談した。以上の内容は母親面接者から伝えられた。

来談後：対象児には遊戯療法が行われた。母親面接者により母親に対する「新版S-M社会生活能力検査」(三木, 1980)が実施された(#5)。結果は、CA8.1歳時において、身辺自立5.5歳、移動5.7歳、作業8歳、意志交換6.2歳、集団参加3.7歳、自己統制5.8歳であった。母親面接者紹介の精神科bクリニックでは「心因性の情緒障害」と診断された(#9, 13)。終結から約1年後、母親面接者から対象児が精神科cクリニックで「アスペルガー障害」と診断されたことが伝えられた。また、対象児は養護学校に通学するようになっていた。

3. 方法と目的

(1) 方法

筆者は対象児に対して遊戯療法(週～隔週1回50分間)を約2年間行った。同時時間帯に母親面接者が母親(と祖母)に対して面接を行う母子並行の治療構造となった。

H大学附属障害児実践センターは相談を無料で受け入れ、相談者の承諾のもと、記録や分析が行われる研究機関であった。本事例については、録画とその逐語録作成がなされた。従って、遊戯療法過程の内容は単に記憶に基づくものではなく、匿名性に配慮した省略等はあるも客観性の高い資料である。

(2) 目的

本論文の目的は以下の2点とする。

第1に、遊戯療法過程を可能な限りアクチュアルに描出する。

表1 対象児の診断等の変遷

年齢	診断、判定、アセスメントおよび治療、支援	医療・相談機関等
3.5歳	「心の傷」と診断される	精神科 a クリニック
4 歳	「軽度精神遅滞を伴う心因性情緒障害」 療育手帳B 2、と判定される	児童相談所
4～6 歳	情緒障害児学級（週1回）に通う 個別遊戯療法（年1回、1回1.5時間）に通う	同上
7 歳	小学校（情緒障害児学級）入学 情緒障害児短期治療施設入所 養護学校小学部に2年生から転入 「中度精神遅滞を伴う心因性情緒障害」 療育手帳B 1、と判定される	同上 小学校 情緒障害児短期治療施設 養護学校小学部
8 歳	H大学附属障害児実践センターに来談 SM 社会生活能力検査 個別遊戯療法（週～隔週1回50分間）に通う	H大学附属障害児実践センター 同上
11歳	「心因性の情緒障害」と診断される 「アスペルガー障害」と診断される	同上 精神科 b クリニック 精神科 c クリニック

第2に、対象児に対する遊戯療法について考察する。

鑑別困難例の典型と思われる対象児の診断名は、来談前から来談後も変わり続けた。杉山（2009）は、診断名にこだわり過ぎず個別に対応していくことが、臨床現場における「確かな支援方法とする。対象児は、状況不適応、拘り行動、パニック、独語等が観られる一方で、描画やピアノ演奏に興味を持つ等、環境的要因や個人差を考慮しても発達水準の正確な把握は困難であった。しかし、治療的観点からは、症状や問題行動は対象児の危機的徴候として捉えることもでき、それらに含まれる多様な意味や機能の理解は必須とされる（氏原ら編，1999）。対象児のありようは、それが彼らにとって何を意味しているのかを察する手掛かりになると思われ、それは決して個人的特殊性に止まるものではないと考える。

Ⅱ．遊戯療法過程

遊戯療法過程を3期に分け、筆者（以下、Thと表記）の発言を< >、対象児（以下、Clと表記）の発言を「」、対象児がぬいぐるみやパペットによって声色を変えたときは字体を変えて表記した。

第1期（X年6月～X+1年2月） パペットや描画に表出されたClの内的世界

1、Clは母親、祖母と伯父の運転する車で来所した。学校かと何度も聞くClに配慮し、母親面接者を含め6人で遊戯室（以下、Pr.と表記）に入室し、ほどなくClとTh以外は退室した。すると、Clは自分の身長3分の2ほどのミッキーマウスのぬいぐるみ（以下、ミッキーと表記）を手に取り、「私はミッキーと申します」と可愛い声で自己紹介し、拳大の石を「命の宝石」と命名する。ミッキー（Cl）と、Thが手に取ったキツネのパペットは、抱き合う

ように身体を合わせ左右に大きく揺れ動いた。次に CI が手に取ったパペットに Th が「オオカミさん」と呼びかけると、CI は声色を変えて「オオカミじゃなくてネズミと申します」と言う。ネズミ (CI) が「命の宝石」を奪おうとすると、ミッキー (CI) が「だめ！それは私の大事なの」と拒みネズミ (CI) に殴られる。CI は机に向かい「レンタカー」(図 1) を紙に描きながら「ここは学校なの？」と聞く。＜学校じゃないよ。遊ぶ所＞と応えると嬉しそうに笑う。ネズミ (CI) とミッキー (CI) は玩具の車(「レンタカー」)で「未来の街」に行く。キツネ (Th) も行こうとすると、ネズミ (CI) が「学校へ行きなきゃいかなの！」と殴る。キツネ (Th) が「いいんだよ。遊んでるんだもん」と言うと、CI はニヤリと笑い「ホントにこれがいいみたい」と呟く。Th が「オオカミさん」と間違えると「俺はネズミだよ。オオカミではない」と訂正し、Th が謝る。「ライオンで一す。オオカミ…ネズミ…」独語が続く。CI はトランプで作った「学校マンション」にキツネ (Th) を迎え入れ「ネズミのオオカミ先生です」と改めて自己紹介する。オオカミ先生 (CI) は、「誕生日」だと「ケーキ」(図 2) を描く。キツネ (Th) が「命の宝石」をプレゼントすると「ちょっと、まだ」と躊躇い、部屋を一周して「よし、大丈夫かな」と受け取る。カメのお母さん (CI) が「ネズミさん、お風呂に入りましょう」と言い、「オオカミさん…違う、ネズミ…」と独語が続く。Th が「A (CI) くん」と呼びかけると「A くんではない。オオカミ先生」と言う。CI は、「看護婦さん、赤ちゃん、A (CI) ちゃんの死神、伯父さん、B (CI の妹) ちゃん」(図 3) を憎々しげな表情で叫び声をあげたり、笑ったりしながら描き、「先生オオカミになる」と言う。

母親面接者から、観察室で見ていた母親と祖母が「こんなに楽しそうに遊んでいるのは初めて」と涙ぐんでいたことが伝えられた。

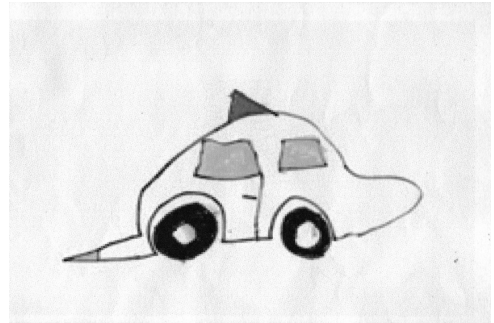


図 1

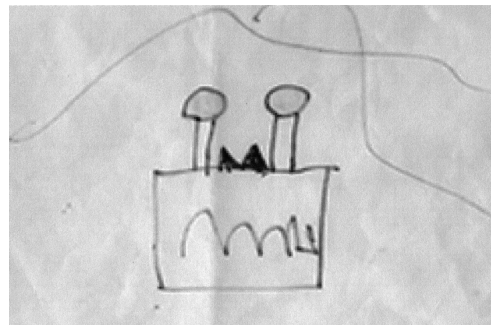


図 2



図 3

2、真っ先に「あっ、オオカミ先生だ」と手に取り、Th にキツネを渡す。しかし「女王様」(図4)を描くと独り遊びに耽る。オオカミ先生(CI)が叫び、虫の死骸を粉々になるまで玩具の刀で叩き「潰しました」と言う。白板に顔(図5)を描き、「嫌だ」と叫び走り回る。終了時は可愛いらしい声で「ありがとう。今日も…来てたね」と言う。

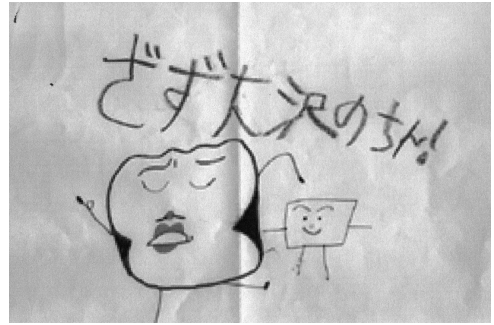


図4

3、「今、夢をみてるの」と寝転がる。欠伸をし、腹部を露出して臍^{へそ}に指を入れたり、放屁する。傍らに寝転んでいたThの身体の上に足をのせ、ミッキーを持って「パープー」と乳児のような声をあげる。終了時、「今日も楽しかったね」と言う。

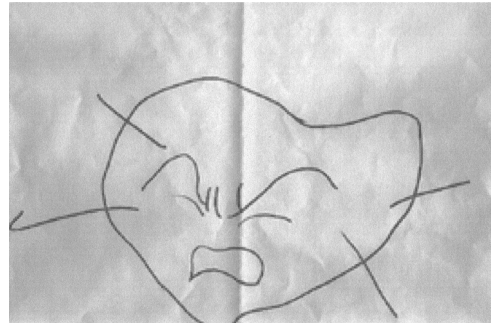


図5 (筆者による模写)

4 (夏休み明け)、CI はオオカミ先生を「ネズミ」と呼び、独り遊びに耽る。蛙の死骸

に玩具を押しつけるが潰さなかった。お気に入りのパチンコ店の看板を描き、Th に指示して彩色させる。CI は共同で完成した描画を両手で持ち踊るように喜んだ。

母親面接では、伯父、担任教諭や周囲との会話が増え、パニックが減少したことが話されていた。

5、ミッキー(CI)が足に付いているタグを切るため鉋を要求する。Th が取り合わないで「足が痛い」と訴える。キツネ(Th)が宥めるも、「ハサミー」と手で顔を覆い泣き出す。オオカミ先生(CI)は「ハサミー」と叫びながら鉋の刃の部分を描き「難しいけどハサミを取って来てくれるかな」とキツネ(Th)に頼む。キツネ(Th)が躊躇っていると「いいかげんにい、ハサミを取って来るんだー」と怒鳴る。オオカミ先生(CI)、看護婦(CI)と警官(CI)が鉋で切らないと痛みが治まらないことを話し合う。キツネ(Th)が<いってらっしゃい>と口を挟むと、オオカミ先生(CI)が「そんなの言ってませんよ」と嗜め、キツネが取って来るといふ三者の結論に達する。仕方なくキツネ(Th)が鉋を取って来ると、オオカミ先生(CI)は「ウワーッ。ありがとう、ありがとう」と大喜びし、描画に鉋の柄を描き加える。ミッキー(CI)がオオカミ先生(CI)に礼を言うので、キツネ(Th)が<ハサミ持って来たのはキツネさんだよ>と訴えると、CIは「もう一度言って。ハサミ持って来たのは僕だよって」と言

う。キツネ（Th）が繰り返すと、オオカミ先生（Cl）は「ああ、そうだったの」と応えた。

母親面接では、児童相談所での「中度精神遅滞を伴う心因性情緒障害」の判定について話されていた。母親は検査時のClの調子が悪かったこともあり納得していなかった。Clは入浴を嫌がり、母親が無理矢理入れるも下着のまま入るという。「僕、悪くない」、「僕、嘘ついてない」と頻繁に訴えるとのことだった。

6、絵が描かれていたClの足にキツネ（Th）が触れる。Clはキーボードを片手で弾きながら片手をThの膝の上に置き、Thにもたれかかったり、時々顔を見たりする。ミッキーを抱いて寝転び、キツネ（Th）がClの身体を食べていくふりをする嬉しそうに笑う。

母親面接では、Clも母親も来所を楽しみにしていることが話されていた。

7、玄関ホールで、Clは自分の首に描いている絵を「うんこ」と言い母親に睨まれる。Pr.では独り遊びに耽る。「お片付け」と言い出し、Thが遊ぶよう促しても「あっ、もうこんな時間だ。お片付けしなきゃ」と片付けてしまう。玄関ホールで母親を待っている間、ThがClを抱っこしてソファにゆったり座る。＜気持ちいいね＞と言うと、Clの全身の力が一瞬抜けるが、すぐに起き上がり、奇声をあげたり、独語を言いながら歩き回る。

母親面接では、初めて自宅で友達と遊んだことが話されていた。Clは「鬘^{かつら}だから」と散髪を拒み、母親は髪を引っ張って「鬘^{かつら}じゃない」と叱って散髪していた。

8、玄関ホールのソファでうずくまっているのでThがオオカミ先生とミッキーを取って来てPr.に誘うと、Clの方から腕を組んで来て一緒に入室する。オオカミ先生（Cl）は「ウォーツ」と吠え、＜オオカミ先生＞と呼びかけると「ワシはネズミじゃ」と言い、Thが間違うたびに「ネズミ」と訂正される。一方、カメのお母さん（Cl）とオオカミ先生（Cl）がキツネ（Th）を両側から挟み、三匹が身体を合わせて揺れ動く。＜気持ちいいなあ。温かいなあ＞とキツネ（Th）が言うと、オオカミ先生（Cl）がキツネ（Th）にキスをする。Clはミッキーを持ってThの膝の上に座る。＜温かいね。気持ちいいねえ＞と言うと「パープー」と乳児のような声をあげ全身の力が抜ける。「うんこの絵をね、描いたの」と言うので＜良かったね＞と応じると啞然とした表情になる。

9、Clは「ファーファ」（持参した子熊のぬいぐるみ）を持って乳児のような声をあげる。「婆ちゃん、部屋を追い出された。さようなら」と告げ、独語で走り回ったり、マジックミラーに映る自分と話し、Thを寄せつけない。突然扉を開けたので終了したいのかと聞くと「もうこんな時間、お片付けしなくちゃ」と叫び走り回る。

母親面接では、母親面接者紹介の精神科bクリニックに行き、医師と祖母が喧嘩になってしまったことが話されていた。

10、Clは音楽ボード（知育玩具）に「ほし、めがね、あひる、へび」と言いながら平仮名を入力する。母親を「ファーファの母さん」だと言い、キツネ（Th）にキスしようとするが途中で止める。最後に「さあおかたづけだ」と入力し、途中でわかったThが思わず吹き出

すと、CI はニヤリと笑い「お片付け」と言う。

#11、キツネを手にとって Th の顔を見ながら「キツネさん大好き」と言う。キツネ (Th) が CI の頬にキスすると「変身して幸せになるの」と言う。オオカミ先生 (CI) とキツネ (Th) が一緒に玩具で遊ぶ。キツネ (Th) が迷いながら＜ネズミさん＞と呼びかけると、「もうっ、オオカミ先生だ」と訂正し、キツネ (Th) の口を捕まえて数回キスをする。そして、オオカミ先生 (CI) とキツネ (Th) は抱き合うように身体を合わせて左右に揺れ動く。「お片付け。あっ、もうこんな時間」Th に抱っこされたり、一人で片付けたりすることを繰り返す。

母親面接では、CI が母親を「お母さん」と呼び、毎晩電話が架かってくることを嬉しく思っていることが話されていた。

#12、オオカミ先生 (CI) は「おはようございます。ガオーです」とキツネ (Th) に甘えてくる。オオカミ先生 (CI) はキツネ (Th) と抱き合うように身体を合わせた後、「一人で遊びなさい」と言う。キツネ (Th) が＜嫌ーっ、寂しい＞と言うと笑いながら「嫌ーっ」と返す。CI は警官のパペットを手に取りキツネ (Th) に「よろしくお願いします」と握手する。警官 (CI) はオオカミ先生 (CI) の髭を引っ張り、^{ひげ} 抜けないと怒る。キツネ (Th) が引っ張ろうとすると、オオカミ先生 (CI) が「ガウーッ」と吠える。＜引っ張りたい＞「コラーッ、いい加減にしろー！」キツネ (Th) が遊んでと頼むと、カメのお母さん (CI) が「じゃあ勉強しろ！テストは書いてないだろ。何で30点なの」と怒る。キツネ (Th) が一生懸命やったと返すと、「コラ、コラ、コラーッ！一生懸命やってもじゃないだろ」と笑いながら怒鳴る。「学校へ行かなきゃ！」キツネ (Th) が遊んでの方がいいと返すと、「早くお風呂に入りなさい！ご飯食べなさい！」と怒る。キツネ (Th) がお風呂嫌いだと返すと CI が笑う。すると、オオカミ先生 (CI) が日曜日は学校が休みだと気づき「ちょっと幸せになる」と言う。Th に＜今日は日曜日＞と復唱させる。カメのお母さん (CI) が、キツネ (Th) が学校を休んだことを謝っている時も、Th が＜今日は日曜日＞と応じた。

母親面接では、母親面接者紹介の精神科 b クリニックで「心因性の情緒障害」と診断されたことが報告されていた。

#13、「ファーファの誕生日」だと言い、全てのパペット (CI) が乳児のような声で泣く。キツネ (Th) がオオカミ先生 (CI) に遊ぼうと誘うと「テストだから」と断られる。キツネ (Th) がテスト嫌いと言うと CI がニヤリと笑う。「お片付け」Th が取り合わないと言語が続く。

#14、描画を終えると片付けようとする。Th が遊ぼうと誘うと「お大事に」と言う。再度誘うと「お家行ってね、婆ちゃん向かえに行ってね、パチンコ巡り行かなきゃいけないんだ。写真撮るの。カメラ買ってきたの」と説明し、退室しようとする。Th が片付けるよう促すと「あっ、お片付け、お片付け」と言い、Th の指示通りに一人で片付ける。

母親面接では、お気に入りのパチンコ店の看板を見ながらドライブするのが好きなことが話されていた。

#15（冬休み明け）、オオカミ先生（CI）はB（CIの妹）ちゃんが学校に行ったと号泣するがキツネ（Th）と抱き合って新年の挨拶をする。しかし、ミッキー（CI）が「しめまして、おめでとう」と言うと、オオカミ先生（CI）が「何っ、ガブッ」とミッキーを噛み逆さまになるほど怒り狂う。ファーファ（CI）にも噛みつきファーファ（CI）が泣き出す。キツネ（Th）が「誰にいじめられたの？」と聞くと、オオカミ先生（CI）が苦しそうに「はい。本当はねえ、あっちこっちのせい」と呟き、「いじめちゃった」と告げ、「ちょっと、ごめん」と謝罪する。しかしまたファーファ（CI）をいじめ、キツネ（Th）が「<どうしていじめるんですか？>」と怒る。オオカミ先生（CI）が「違う。あのお、坊や、机のせいなんだよ」と言う。「髭ひっぱってー髭ひっぱってー♪」と歌い、警官（CI）がオオカミ先生（CI）の髭を引っばる。オオカミ先生（CI）は「ファーファ、夢をみてるの」と言う。いじめられている夢を見ているのかと聞くと「ちょっとお、何して…ちょっと考えようかい」と言う。キツネ（Th）がファーファ（CI）に「<どんな夢をみてたの？>」と聞くと、オオカミ先生がいじめる夢をみてたと応え、オオカミ先生（CI）は「ご心配おかけします」と謝る。しかし今度はキツネ（Th）が警官（CI）に殴られる。キツネ（Th）が「<オオカミ先生のせいだよお>」と泣くと、ファーファ（CI）が「せいでよねーっ」と叫び、二匹で泣き続ける。すると、カメのお母さん（CI）がキツネ（Th）を抱くように身体を合わせ左右に揺れる。「あっ、もうこんな時間」とCIが言うのでキツネ（Th）が「お母さん、もっと抱っこしてー」と甘える。カメのお母さん（CI）は「コラ、コラ、コラーッ！」と怒り、キツネ（Th）の尻尾を食べ始める。「<お母さん、僕の尻尾だよ>」「だって美味しいもん。パクン、パクン」<だめだよお>「タリラーお片付けの時間♪じゃあ、また♪」<どうしてお片付け急ぐの？>CIはThの膝の上に足をのせ「写真撮らなきゃいかんの。写真撮るときは必ず…片付けようと思うの」と応え、走り回る。「お片付けしなきゃ。ファーファ、お片付けしましょう」独語を言いながら片付ける。Thがいつも家にいるのか、学校は行かないのか、妹は学校に行くのか聞くと、首を縦横に振って答える。まとめて確認すると「うん」とはっきりと応え、「じゃあ、おじゃましました」と言う。「<はい、おしまいにして下さい>」CIは「ウキウキッ、トオーッ」と飛び跳ねて元気に退室する。

母親面接では、CIが祖母との会話の中で冗談^{ジョーク}がわかるようになってきたこと、「ハンサム坊や」と呼ばれるのが気に入っていること、外食ができるようになったこと、自分の意志を主張し始めたことが話されていた。また、ドライブ中にCIと祖父が喧嘩して、母親、妹と一緒に車を降り、おにぎりを食べながら3人で手を繋いでゆっくり歩いて帰ったことが話されていた。母親も嬉しかったということだったが、CIが来所してすぐに「おにぎり3つ買ってきた！」と言ったのは、嬉しかったことを伝えようとしていたのだと思われた。

#16、オオカミ先生（CI）とファーファ（CI）で遊ぶ。Thがミッキーを持って入ろうとすると、CIはミッキーを取り上げ「それ置いておくの」と窘める。キツネ（Th）が入ろうとすると、オオカミ先生（CI）とファーファ（CI）がキツネ（Th）を間に挟み歩き回る。カメの

お母さん (CI) にキツネ (Th) が<お母さん>と呼ぶと、カメのお母さん (CI) がキツネ (Th) を抱くように身体を合わせる。「クマは誰？」<ファーファ>ファーファ (CI) がキツネ (Th) と身体をぴったり合わせる。CIは医者のパペットを手に取り「どうしました？」と尋ね、ファーファ (CI) が「ポテトも食べて、ハンバーガーも食べたんです」と言う。キツネ (Th) が<先生、ファーファ大丈夫ですか？>と聞くと「大丈夫です！」と殴る。キツネ (Th) が泣きながら助けを求めるとオオカミ先生 (CI) が「助けてあげますよ」と言う。医者 (CI) とオオカミ先生 (CI) はマジックミラーの前に行き「助けてー、先生。オウ、ノウ。ギーンジュージュー。ファファー。ウーッウワワワー。ガオーツ。…いいですか…デデデイダッー。…助けてきました」と告げる。その後も医者 (CI) は診察を続ける。キツネ (Th) には「パパイヤ食べ過ぎ」、老人のパペット (Th) には「お肉食べ過ぎ」と告げ「ヒッヒッヒッ」と笑うので、Thも笑ってしまう。CIは囁き声で症状を言うよう指示し、男のパペット (Th) が<頭が痛い>と囁き声で言う。CIは「お母さんも一緒に遊びましょう♪」と歌い出し、Thが<一緒に遊びましょう♪>と続けた。「おもしろかった♪おもしろかった♪」<おもしろかった♪>「お片付け♪」と大声で歌いあげる。Thが<まだですよー♪>と笑いながら歌うと、CIはニヤリと笑い「タンタカタンタカタン♪お片付けはまだですよ♪」と歌う。Thが遊びたいと歌うと「あのなー、無理だ」と怒る。独り遊びに耽った後、白板に「おわり」と書き、「片付けよう」とThを促す。Thが<どうぞ、お片付けして下さい>と言うと、「あ、はい」と不意を突かれたような表情になり、Thが笑う。Thの指示に「あ、そうか」と言いながら一つずつ片付けていく。

母親面接では、入浴など他者の提案を受け入れるようになってきたこと、前回から一度も叱ることがなかったことが話されていた。

#17、オオカミ先生 (CI) が叫び走り回り、ファーファ (CI) が泣く。「お片付けしなくちゃ」まだと言うと独り遊びに耽る。扉を少し開けて頭部を廊下に出してうずくまる。Thが背中を撫でてやるとCIの身体が少しずつ解れる。「お片付け…」<して下さい>CIが片付ける。「片付けた」<ボールは？>「あっ」ボールを片付ける。<ミッキーは？>「あっ」ミッキーを片付ける。「できますねー」<できました？>「お片付け」<できました？>「片付けた」。

母親面接では、母親が職場の飲み会で酔っ払って帰宅したことが話された。

#18、渋滞で遅れて到着し、CIは玄関ホールのソファにうずくまり、ミッキーを持って来るよう要求する。遊び終えて二人でPr.にミッキーを返しに行く。玄関ホールに戻って来てミッキーの服が残っていることに気づき、Thと一緒にいってと頼むとCIはニヤリと笑って仕方なさそうについて来てくれる。

第2期（X+1年2～7月） 描画と言葉を使ったコミュニケーション

#19、祖母、叔父と来所し、母親は風邪をひいた妹と病院へ行ったと話す。ツナや卵が入った「リスコの愛妻弁当」(図6)を描き、Thが「美味しくだね」と言う嬉しそう。箸を書きThに差し出す。Thが「いただきます」と食べ美味しく！リスコの愛妻弁当」と言う。「はい。リスコちゃんが作った」<ツナ食べます。美味しい！>「お腹一杯」<まだ。卵食べます。美味しい！>「はい」<ああ、美味しい>「うん」<美味しかった。ご馳走さまでした>次は「おにぎり」(図7)を描き、ClとThが一緒に「いただきます」と言い、Thが食べる。Clは「へへへ…ウフフ」と笑いながら描き、何かと尋ねると「美味しい弁当！」と言う。「ウンチ弁当」(図8)<嫌だあ。ウンチ弁当なんか嫌だよ>「だーめ」<凄いねえ。大きいウンチだね>「はい」Thに差し出す。<うわっ。食べるんですか？>「はいっ！」Thが「いただきます」と食べ「くちゃーい！」と叫ぶ。Clは笑いながら「美味しかった？」と聞く。Thが「うん」と食べ「くちゃーい！」と言うと、Clは笑いながら「美味しくなあれっ」と言う。さらにClは「ケラッケ弁当」と「焼きそば」を描き、Thが食べた。

母親面接では、伯父と冗談^{ジョーク}を交わしたり、要求をあっさり諦めるようになってきたことが話されていた。

#20、Clは玄関ホールで動かず、Thが励ましてPr.に行くと自ら扉を開けて入室する。Thがオオカミ先生を準備できず<学校へ行った>と言い訳すると、Clは驚いた表情になる。Clは渋滞で遅れたことや好きなアニメのことを話したり、文字を書いたり、独語を言ったり、叫びながら歩き回ったり、Thに甘えたりした。

母親面接では、漢字を覚え始め、担任教諭の家庭訪問を楽しみにしていることが話されていた。

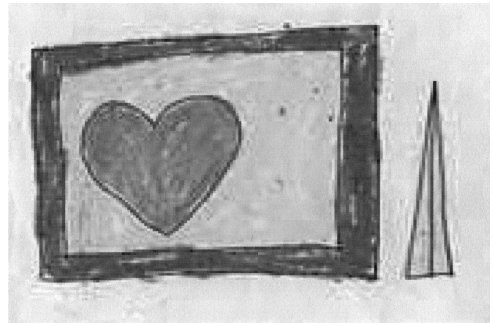


図6（筆者による模写）

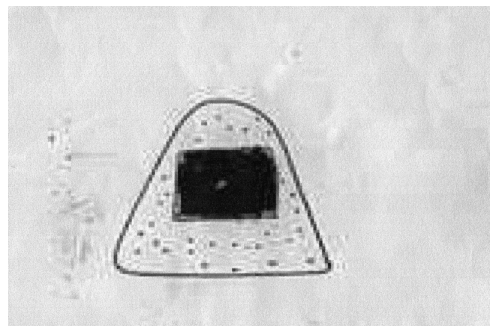


図7（筆者による模写）

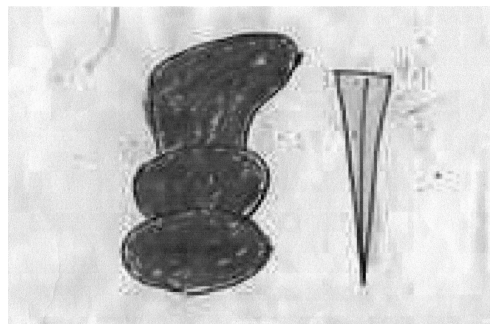


図8（筆者による模写）

#21、CIは「スパゲティ」「油揚げとなるとが入った大阪名物きつねうどん」「大きな美味しいメンマが入ったチャーシュー麺」を描き、Thが<ワーイ、大好き。スゴイ>と拍手する。「カップラーメン」を描き「これどうだ。美味そうだろ」と言う。「食べたいのか？」<うん。食べたい！>「あーごめん。俺が食べちゃったから空っぽ」Thが<えーっ、何それー>と背後にひっくり返る。CIは「グルグル描ける線描きマシン」で鼻歌まじりに描く。「じゃあ、お姉さんもやってみるか」とThに「あっちへグルグル、こっちへグルグル」と指導し「できた」と言う。<できた！見て>とThが絵を両手で持ち上げると、CIは「えー、お姉さんの線描きマシンも面白いけど、これも凄いでしょ」と自分の描画を見せる。その後もCIはThの手を持ち二人で一緒に描く。CIは「あー上手いなあ」とThを褒め、Thが拍手する。「はい、ご挨拶に見せて」<はい。ご挨拶。これは…>「スイスイクルリの」<スイスイクルリの>「絵でーす！」<絵でーす！>「ワーイ」CIは「グルグルお蕎麦」を描き「一丁あがりー」と出し、Thが箸がないと言うと「はいはいはい」と描き加える。Thが<料理上手だね>と褒めると、「玉葱」と「お饅頭」を「おやつ」に出してくれる。

母親面接では、母親がCIを心から「抱けない」ことが告白されていた。

#22、オオカミ先生（CI）にキツネ（Th）が<おはようございます>と挨拶すると「おはよう」と返ってくるが「バイバイ」と去る。CIは独り遊びに耽り、独語で歩き回り、奇声をあげて机に向かう。Thに指示して絵を描かせ、はにかみながら「もうこんな時間」と言う。

母親面接では、CIは決まった下着しか着用しなかったが、別の下着も着用するようになったことが話されていた。

#23、玄関ホールで泣いていたので肩を撫でて宥め、抱っこしてPr.へ連れて行く。寝転んでパペットで遊び、靴下を脱ぐ。起き上がって絵を描きThに見せると「もう、お片付け」と言う。「靴下履いてよ。靴下取ってよ」と言うのでThが靴下を持って手招きすると「嫌だ！ここに来てよー！」と自分の身体を叩く。Thが傍に行き<足をお出し下さいませ>と履かせてやると嬉しそうに笑う。

母親面接では、Thの対応を見て感動したこと、自分は「鬱陶しいと思ってしまう」ことが告白されていた。

#24、玄関ホールのソファに寝転び「おもちゃ箱になったの」と言う。Thが促すと起き上がりPr.に小走りで向かう。歌いながら動物を描く。<赤ちゃん？>「赤ちゃんじゃない。違う！」CIに似ていると笑うと「違う、違う！」と強く否定し、オオカミ先生（CI）が「何っ！」と怒る。鼻歌まじりで描き終わると説明してくれる。Thが<凄いいー。上手だね>と褒めると笑顔で歩き回る。

母親面接では、山で遊び、お弁当を食べ、楽しかったのか中々帰ろうとしなかったことが話されていた。

#25、Pr.に一人で走って行く。腹を露出し「腹踊りー！」と言ったり、スキップしたり、

スケボーに乗ったりする。「コンビニ巡り」に行くのだという。「変身」と言っておオカミ先生
 手に取るが遊ばず絵を描く。「よおし、お片付けするぞ」＜まだまだよー＞「何でよー」
 ＜もっと遊んで下さいよ＞CIは寝転んでThの指を自分の耳の穴に入れて耳垢を食べよう
 要求する。Thが食べるふりをすると、それは「うんこ」だったと笑う。「うんこ食べたろ？」
 ＜うんこ食べたよ。くちやーい＞「ウンチ弁当」＜ウンチ弁当食べたよー＞CIは母親に玩具
 のカードを見せると言って出て行こうとする。＜まだだよ＞「何でよー」＜まだ来たばかり
 じゃないよー＞「嫌だよ」CIとThは笑いながら言い合う。Thがジャンケンに誘う。ルール
 は十分理解していないが、Thが勝つとあっさり認め、CIが勝つと「やったー」と背後にひっ
 くり返る。

母親面接では、家族旅行があったが、CIが絶対嫌だと言ったので母親と留守番し、母親に
 とても甘えてきたことが話されていた。

#26、Pr.に一人で走って行き、飛び跳ねながら走り回る。CIは額と鼻に絆創膏を貼ってい
 た。「ドターッ」と転んだ様子を再現し、痛かったこと、母親が消毒したことを話す。絆創膏
 を取ってくると部屋を飛び出し、Thが追いかけて捕まえる。＜お母さん、今は先生とお話し
 てるから＞と言うと、不満げに「はあい」とPr.に戻る。自分の顔をThに描かせる。「眉毛は
 太く、目玉には星がキラッと、目と鼻に絆創膏貼ってるんだよ」完成した絵をCIの方に向け
 る。＜可愛い＞「できた」＜できたよ。これは誰ですか？＞「俺なんだ」次はThの絵を描い
 てと頼むと「レディ姉さん」を描いてくれる。Thが拍手して＜素敵！ありがとう＞と言うと
 「大事にしてな」と言う。母親の絵は「描かない。優しくないんだ。俺の父さんと結婚するん
 だ」と言い、祖母の絵も「描けないですねえ！」と言う。ジャンケンに誘うと「俺チョキ、お
 姉さんがパー」と言うので＜だめー。だめ、だめー＞と二人で暫く笑い転げる。二人で声を合
 わせてジャンケン…と始める。＜チョキ！お姉さんの勝ち＞また二人で声を合わせて、あいこ
 で…と言う。「チョキ！やったー！やったー！」CIが勝って飛び跳ねて喜ぶ。「片付ける」
 ＜はい。もとにあった所へちゃんと持って行って＞CIが次々と片付ける。Thが＜はい、これ
 はパスパスパス＞とボールを投げると、CIは受けそこなうが拾って片付ける。「やったー！」
 ＜やったー！＞Thが拍手した。

#27、祖母におんぶされて来所する。祖母がCIが前後逆に着ているシャツを直そうとする
 が嫌がる。Thが＜おはよう＞と言うと「おはようさん」と応え、「行こう」と言って走って行
 く。持参した玩具のカードで遊び、Thにあげられないから「ごめんね」と謝る。歌いながら
 絵を描いたり、独語で歩き回ったり、叫び声をあげる。母は教習所、妹は学校、祖父は会社、
 自分はここに来たこと、鼻はもう痛くないことを話す。Thがシャツの前後を直そうとすると
 「嫌だ」と言い＜えっ、どうしてよ＞と聞くと笑う。ジャンケンで決めることにする。「じゃあ、
 俺チョキだからお姉さんがパー」＜嫌ー＞CIは大笑いする。Thが勝ったら直すことを確認し、
 ＜指切りげんまん＞をする。二人で声を合わせてジャンケンポンと出す。＜勝ったー！お姉さ

ん勝ったよ！＞CIは笑いながら「嫌だ^やよー」と言うがThがシャツの前後を直す。また二人で声を合わせてジャンケンポンと出す。＜お姉さん勝った＞声を合わせて、あいこでしょと出す。「やったー！やった、やった」CIが勝って片付ける。「片付けたー」二人で拍手する。

#28、描画の空の部分をThに彩色させる。＜あなた、もしかして塗るのが嫌なんじゃない＞「難しい」＜もしかして嫌な仕事をお姉さんにさせてないですかあ＞Thができたと言うと、塗られていない部分を指摘する。CIがスケボーに乗りThが腕を支え二人で移動する。「ありがとう」＜いいええ＞「スイスイスイスイ」椅子に座り、隣の幼児用の椅子にThに座るよう示す。＜えっ、そこに座るの？ありがとう。よいしょ。あっ、お尻が入らない。どうしょー＞と笑うと、CIも笑う。CIがジャンケンの体制になってThを促す。二人で声を合わせてジャンケンポンと繰り返す。CIは「ジャンケンポン、ジャンケンポン、あいこでしょ♪パーをしてね、お姉さん♪」と歌い出し＜パーはしないよ、負けちゃうよ♪＞とThが歌い返す。CIは勝つと飛び回って喜ぶ。＜負けちゃったよー。ジャンケンが強いなあ＞CIがThに身体を預け床に寝転ぶ。Thが＜腹踊りー＞と笑うとCIも笑う。CIが放屁しThが＜あっ、おならした。くちやいー！＞と言う。「おならプー」＜ぷーした？＞「やったー、俺の勝ちー」＜くっさいなあ。何が俺の勝ちよ＞「だって俺の勝ち」＜おならしたら勝ちなの？お姉さんもおならしていい？＞「だめ。おならくさいからだめ。あっかんべー」変な顔をしてThの顔だと言う。そして、入浴したので臭ってとせがむ。Thが＜いい匂い。えらいね＞と言う。再びジャンケンをしてCIが勝つと「行こう！」と元気よく言う。「俺、コアラ大好きなんだ。俺、コアラになるんだ」

母親面接では、母親が苛立っていたためCIもイライラしてパニックになるということが3日間続いたことが話されていた。

#29、声をかけると照れたような素振りでPr.に走って行く。絵を描いたり漢字を書いてThに渡すということを繰り返し「片付けよう」と言う。Thが取り合わないと言語で歩き回る。Thが妹について聞くと「学校」と応え、自分は嫌いだから「行かないよ」と言う。CIは「ジャンケンポン、あいこでしょ」と囁き声で合図する。Thがあいこになるようチョキを出し続けると、CIはThの手をパーにする。ThもCIの手をパーにしてチョキで切るふりをするとCIが笑う。CIのズボンが前後逆だったので直そうと言うと「嫌だ、嫌だ^やよ」と笑う。ジャンケンを提案しThが勝つも「もう一回！」と笑って逃げ回る。Thは＜履き替えなさいーい＞とゾンビのように追いかけながら言う。CIは笑い、「嫌ー。嫌ー」と刀を振り回しながら逃げ回る。＜ズボンを履き替えろー＞「嫌。恥ずかしー」Thの目が回って降参するとCIは「やったー！やったー！」と喜ぶ。CIは蛾の死骸を見つけて「生きてないよ」と拾いThに手渡す。「ペットにするんだ。リスコちゃん」CIは「海よ空、山、道を走る」（描画9）を描き、蛾の死骸を紙上に乗せ、息を吹きかけて飛ばそうとする。

#30、母親、伯父、自分の顔を描き「これ母さんが喜ぶ」と言う。マジックミラーに自分の

顔を映し「これは悪魔。悪夢好き？」と聞く。
 <悪夢って何のこと？>「うんこ」片付けに
 Th が取り合わないといひとり遊びや独語になる。
 「あっ、そうだ。ジャンケン、ジャンケン」と
 言い出し Th が笑ってしまう。Cl が勝つが後出
 だったので<一緒にね、出さなきゃいけない
 んだよ>と説明する。独語で歩き回るが、Th
 がフルネームで呼ぶと「はい！」と返事をし、
 <ちょっとこちらに来て下さい>と言うと Th



図 9

の前に来て正座するので Th が笑う。Cl の絵を一緒に見て Th が拍手する。「はい、終わり」Th
 がミッキーに洋服を着せるよう言うとい拒否する。<ミッキーさん風邪ひいちゃうよ>「あーん」
 <ミッキーさんのお洋服を着せてあげなさい>と Cl をくすぐると笑う。<風邪ひくよ>「ひ
 かないよ」<ひくよ>「嫌だ！」<どうするの。ミッキーさん風邪ひいちゃうよ>「俺が…俺
 がミッキーさんを脱がしたんじゃないの。着せてあげてよ」<さあ、ミッキーさんに着せてあ
 げましょう>「あなたがやりなさい」<えっ？>「あなたがやりなさい」Th が何でよと言
 いながらくすぐると笑う。<何で。あなたがやりなさいよ>Cl は笑いながら「嫌だよー」と言
 い、互いにあなたがやりなさいよと言いつ合う。ジャンケン勝負となり、Th が勝つと Cl は倒れ
 込み、約束だと言いつても拒否する。Th がくじゃあ、もう一回ジャンケンしてお姉さんに勝ち
 なさい>と再びジャンケンをする。Cl が勝ち Th が着せようといすると「俺がミッキーさんの足
 を持つ」と言う。Th が<着せてあげるからね>と言うとい、ミッキー (Cl) が「うん、ありが
 とう」と言う。着せ終えとい Cl がミッキーを片付けた。

第3期 (X+Ⅰ年9月～X+Ⅱ年3月) 言葉が主となったコミュニケーション

#31 (夏休み明け)、玄関ホールのソファで寝転んでいる。声をかけると起き上がり一緒に
 Pr. へ行く。ミッキー (Cl)、オオカミ先生 (Cl)、警官 (Cl)、カメのお母さん (Cl)、キツネ
 (Th) が交互にじゃれ合つた後、オオカミ先生 (Cl) が泣き叫ぶ。オオカミ先生 (Cl) は警官
 (Cl) と戦い、カメのお母さん (Cl) に刀で切られてしまふ。Cl はオオカミ先生を持つたまま
 寝転んだり絵を描いたりする。夏休みはキャンプに行き楽しかつたこと、海に行きたかつたが
 山に行つたことを話す。妹は「学校」、祖母は「プール」、祖父は「会社」と言う。Cl は学校
 へ行かないのとい聞く。「行かない」<どうして？>「嫌い」オオカミ先生を放り「あっ、もう
 こんな時間かなあ」と言う。Cl はジャンケンで勝つとオオカミ先生を玩具箱に放り投げる。
 Th が待っているから片付けてと言いつと、Cl は Th を見て動かない。再度促すと「片付けてよ」
 と言いつ。Th が<どうぞ>と言いつと「嫌ーだよ」と言いつながら Th の傍に来る。Th が待って
 るよとい促すと「終わったよ」と言いつと離れる。Th が Cl の名前を呼んで促すと、Cl はパペッ

やぬいぐるみを拾って玩具箱に投げ入れ、Th が終わりを告げる。

母親面接では、CI はキャンプへ行かず、母親と妹が実家で泊まり、一緒に音楽番組を観たりして過ごしたことが話されていた。その間、CI は大便を日に2～3回床に漏らしたということだった。

#32、ミッキーとじゃれ合った後、Th の膝の上に足をのせて歌詩を書く。わからない漢字や平仮名を Th に書かせて模写する。机がずれたので Th が直すと CI が引^やっ張る。「嫌だよ」<何でだよ>「だめだよ」<何でだよ>「こっちこないでよー」双方で机の引き合いになり、CI が椅子から滑り落ちて右膝を床で軽く擦る。「痛いよー痛いよー」CI を起こして椅子に座らせる。「血出てる」Th が CI の足を撫でる。「薬持ってきて」笑いながら<要らないよ>と返すも繰り返すので<薬ないよ>と言う。撫でても「まだ痛いよー」と訴え「痛いよー痛いよー痛いよー」と机に突っ伏して泣く。CI が Th の胸元を泣きながら手で突き、Th が CI の足を撫でることを繰り返す。そして「嫌だよー嫌だよー。薬持ってきてよ！」と Th の頬をパシッと引っぱたく。Th が驚き、同様に CI も驚く。<…痛い>「ごめんな」<痛い！>「ごめんな、ごめんな」<お姉さん叩いたよ>「ごめんなって言うの」<うん> Th と CI が向き合う。「だってこけたんだよ。擦りむいてるよ」Th が医者と看護婦のパペットを持って来ると「おもちゃじゃないよ。おもちゃだよ。こんな違うよ。だめだよー！」と泣きながらパペットを放り投げる。<だめなの>「うん」<どうしよう> CI が Th の胸元を手で突く。<お薬捜して来ようか>「うん」Th が薬箱を取って来ると CI が傍に来て座る。CI は足の擦った部分をクレヨンで赤く塗っていた。Th が CI の足を膝の上に乘せて手当する。「沁みる？」<沁みるぞー> Th が薬を塗った所をフーッとふいてやる。<痛い？>「うん」再びフーッとふいてやる。<痛くない？>「うん」絆創膏を貼ると CI が離れる。Th が呼ぶと傍に来て座り Th は痛くない<おまじない>を行った。そして薬を塗ってあげたので、今度は CI が<く頭をなでなでして下さい>と言うと、CI は「なでなでしてもいいんだけど」と躊躇う。しかし、Th の頭をそっと撫でてくれる。<ありがとう。じゃあ終わろうか>「うん」片付けるよう言う「あれは俺じゃない」と言うが、Th が<片付けてくれないの？>と言うと片付ける。

母親面接では、些細な事でパニックになり家族に暴力を振るい、母親がやり返し双方がエスカレートしていったことが話されていた。

#33、持参した紙袋を逆さまにして中味を出し、おにぎりを Th に手渡す。誰が作ったのか聞くと「お母さんです」と応える。Th がボールを転がし CI が受け取る。<おにぎりもボールみたいだね>「おにぎりボール、はいっ」<おにぎりボール、はいっ>「嫌ーっ。プレゼントします」と Th に転がす。再び Th が CI に転がすと、Th に転がし「投げないでね。じっとして」と言って、おにぎりを食べる。カードと一緒に読んだり、「これ、似合う？」と自分の洋服について聞いたり、おにぎりを食べながら歩き回ったり走り回ったりする。<おにぎり美味しいですか>「おにぎりじゃない。キスしてるの」CI は自分で水筒のお茶をコップに注いで

飲む。「あーっ、まずい！緑茶」おにぎりを再び Th に手渡し「食べとき」と言う。「いいよ。食べていいよ」絵を描いたり、玩具で一人遊びに耽る。「ワー。みなさん、お茶ですよ」CI はオオカミ先生、ミッキー、ボールにお茶を飲ませる。皆が飲んだので「次は俺」と CI が飲むということを水筒が空になるまで繰り返す。＜終わった？＞CI はおにぎりをオオカミ先生、ミッキー、ボールに食べさせる。「じゃあ、お姉さん食べて」Th が食べたふりする。「ううん。食べてごらん。味を…パクッと」と CI が一生懸命食べ方を示すので Th が食べる。「味はどうですか？」＜美味しい＞「グッド？」＜うん、グッド＞CI は「食べちゃったのぉー」と叫び走り回る。Th が終了を告げると「俺はここにいるから」と言う。

#34、玄関ホールで紙袋が重いとぐずる。Th が紙袋を持つと、途端に機嫌が直り一緒に Pr. へ行く。紙袋を逆さまにして母親に買ってもらった本や母親手作りのサンドイッチを出す。Th の周りを独語を言いながら歩き回ったり、走り回ったりする。「いたずらするぞー！」とクレヨンの箱で机を叩いたり、好きな女性歌手や女優の名前をあげながら絵を描く。「リスコちゃんの絵かく」両足を Th の膝の上ののせリズムをとったり、独語を言いながら絵を描き続ける。「できた」Th が拍手して片付けるよう言うと、紙袋に本とサンドイッチを入れる。

#35、玄関ホールのソファから動かず、Th が促すとゆっくり歩いて Pr. へ行く。扉を開けると奇声を発し走り回る。独語を言いながらミッキーの上に寝転ぶ。Th はボールを CI の手、肩、腰の上で転がす。Th が今度はミニカーで CI の身体の上を走ろうかなと言うと「嫌だ」と言う。Th は CI の背中、腰、足を撫でてやる。足元にあった玩具の箱を除けてくはい、どうぞ。足伸び伸びできるよ>と言うと、CI は縮こまっていた身体を伸ばす。Th は添い寝して CI の背中を撫で、CI は歌ったり独語を言う。Th がミッキーが<重いよ>と言う。「大丈夫でしょ」<痛い痛いって言っているよ>「嫌！お布団になってるの」<寒くない？大丈夫ですか？>CI は両足をバタバタ動かし、Th の足の上にのせる。暫くすると CI は上体を起こしミッキーを自分の身体の下から引っ張り出す。「お休みできた」CI は妹の名前をローマ字で書いたり、数字や文章を書く。＜そろそろお片付けしませんか？＞「あのお、気付いたんだけど」独語になり絵を描き続ける。＜行こうかなあ。行こうかなあ。行きますよぉ>「わかってるって！」Th が笑う。

#36、玄関ホールで声をかけると一緒に行きかけるが、祖母の隣に座りに戻る。立ち上がって Th と歩き出すが「ちょっと待って」と引き返して祖母の隣に座る。暫くして一緒に Pr. へ行く。ミッキーと寝転び、頭が痛いと訴える。看護婦（Th）が頭を撫でてやると甘えた声で「痛いー」と言う。独語から「痛いよー」と泣き声になる。看護婦（Th）が宥める。「痛いよー。頭が痛くて学校へ行けない。お医者さん呼んできて」＜このお医者さんじゃだめ？＞Th が医者者のパペットを手にする。「だめなの。それは嘘だから。…リスコちゃんのところへ」＜リスコちゃん病院知ってるの？どんな病院？＞「あっち」Th は CI の頭を撫で<頭痛いの冷やしてあげましようね>と刀を CI の額にあてる。CI は暫くすると起き上がり走り回る。＜大丈夫で

すか？>と聞かれると「ああ…、また痛いよー走れない」と急によろける姿が芝居がかったいたので Th が笑う。絵を描いたり、奇声をあげて走り回ったり、独語を言いながら歩き回る。マジックミラーに描いてもいいかと聞くので、怒られるからだめと言うと「ワァー！」と大声で叫び走り回る。「お休み！」と言うので Th もお休みと返して笑うと「嫌だあ！」と叫ぶ。マジックミラーを刀で数回切りつけ、「おばあちゃんの CD うりきれ」と紙に書く。CD を買いに行かなかったこと、悲しかったことを話してくれる。顔を悲しそうに歪めながら悲しそうな表情の絵を2枚描く。「これは、婆さんの。これは、母さんの」と絵を持ってグルグル回る。「もういい？行っても」Th がジャンケンに誘い傍に来よう言う。「いいから、いいから」<まあまあ、こちらへ>「いいから、いいから」Cl は笑いながら言う。<まあまあ、こちらへ>「嫌ーだ、嫌だ嫌だ」Cl は笑いながら言う。

母親面接では、自宅で大声で走り回ることがあり、母親はそれを親子喧嘩と捉えて一緒に大声をあげていることが話されていた。今朝は妹が学校へ行きたくないと言うと Cl が行くよう宥めたらしい。祖母の家を「俺の家」と呼び母親がいくら勧めても自宅には泊まらないという。

#37、玄関ホールでぐずっていたが Th が傍に行くと起き上がり一緒に Pr. へ行く。噛んでいるガムを「肉饅」というので<肉饅じゃないでしょう>と Th が笑うと Cl も笑う。白板に「うみは1年じゃなく！カメレオンは5年じゃなく！楽しい人」と書き、Th に読ませる。紙に絵を描きながら、リスコちゃんみたいになること、海が0年とガブリースちゃんが教えてくれたことを話す。「俺、夢をみたんだ」夢の中にエレベーターがたくさんあったと言う。「消さないで」<うん、消さないよ>寝転んで妹は学校へ行き、自分は行かないと言う。「まだー？」Th は終わりたいのなら片付けるよう言う。Cl は白板に書いた文字をきれいに消し、歩き回る。<何食べてるの？肉饅？>「うん」<嘘ばかり>Cl は最後のガムを Th にくれ、スケボーに乗る。<上手になったねえ>「違う！」叫びながら走り回り再びスケボーに乗り、ガムのカスを包んだ紙を Th に渡す。<えーっえーっ>「ゴミは捨てていいよ」Th が笑いながら Cl が捨てなきゃいけないんじゃないのと言うと「違うよ」と言う。白板に「NIPPON」と書いたもので、Th が<学校に行くともっとお勉強できるよ。色々お勉強できるといいねえ>と言うと Cl は独語になる。Th が片付けを促すと「うん」と返事をする。Cl は白板の単語を少しずつ消しながら「何て書いてありますか」と問い Th が答える。最後に Th が<おしまい>と言うと「えへっ」と笑う。

母親面接では、トイレを我慢できるようになってきたことが話されていた。

帰り際に母親と祖母が母親面接者と Th に挨拶をすると、Cl が「ありがとうございました」としっかりした声で言ったので皆が驚いた。

#38 (冬休み明け)、玄関ホールでぐずっていたが「ちょっと待って」と言ってひと呼吸おき Pr. に走って行く。CD を買って来たと言う。「ヨッシーストーリー大嫌いだよ。大嫌いでしょ？」<誰が？>「お姉さん」<お姉さん>「先生は大嫌いでしょ？」<先生？>「ストー

リー大嫌いでしょ」Thが「ヨッシーストーリー」について聞くと「あのなあ、下手くそだよー。許せないー」と言う。独語を言いながら歩き回る。寝転んでCDの歌詞カードを見ながら歌うのでThが傍に行って一緒に見る。＜グレイ＞「グレイじゃないよ。違うよ！発売してない」と離れる。Thがグレイの歌ではなかったかと聞くと「歌ってなかったよ。グレイと違うよ！」と言う。Thが見せてと言うと歌詞カード持って傍に来る。Thが歌ってと言う。「やあだー。歌えないよ」＜さっきまで歌ってたよ＞「歌ってないよ」＜グレイの歌、歌ってるじゃないよ＞「嫌あだ！恥ずかしいなあ」＜恥ずかしいか＞「恥ずかしいよ」＜そうか。ごめんごめん。恥ずかしかった＞「嫌だ。もう許せん！」Thが笑うと「笑ってる場合じゃない！」と言う。Thが別の歌手の曲を歌ってと頼む。「えー、だって俺、歌下手だよ」＜さっき上手に歌ってたよ＞「グレイみたいになれないよー」Thがグレイみたいになれなくても上手だよと言う。独語の後、妹は学校、祖父は会社、母は「ここにいる」、自分は「遊んでる」と言う。Thが歌ってと頼む。「だってグレイみたいになるよ」＜グレイみたいになるの？＞「もうー」＜かっこいい＞「かっこ悪いよ」＜かっこいい。歌お上手＞「歌ってみないよ。嫌だ！恥ずかしいよー！」CDジャケットの文字を書き写す。「まだ？」＜うん？＞「もうすぐ？」Thが笑う。独語を言ったり叫びながら歩き回る。「終わった？」Thが笑いながらジャンケンに誘うと傍に来て座る。ClはThが勝つたびに後方へひっくり返る。Thはグーを出し続けClはチョキを出していたが、気付いたのかパーを出す。Clは勝ち「やったー」と立ち上がる。Thがゴミを片付けるよう言う「はいー」とゴミを拾う。

母親面接では、絵は描かなくなりCDを聴いていることが話されていた。

#39、玄関ホールで室外にいる犬を気にするが入って来られないことがわかるとPr.へ走って行く。独語を言いながら文字を書く。「白、黒」と書き「茶」がわからないと言い、Thが「茶」と書く。妹は犬が好きで猫が嫌い、自分は猫の色が好きだと言う。「犬」と書き、その下に自分の方に来ないでと書き足す。「ぬいぐるみならいいんだけど、動いているから」独語の後、「南極青春に。俺、漢字読めないんだ。俺、だめなんだ。南極」と言うのでThが＜南極＞と書く。その文字の隣にClは「青春」と書く。Thが歌ってと頼むと少し歌う。＜そうそうそう。そうだね、もっと歌って＞Clは歌いながら文字を書く。＜ワンちゃんに来ないでって言えたらよかったね＞「B（Clの妹）ちゃんに犬は殺しちゃだめって言っていたんだ」マジックミラーの前にミッキーを持って行き映す。「見てよー見てよ」＜見てるよ＞ミッキーで犬の様子を再現する。＜ミッキーちゃん、ワンちゃんみたいになってるよ。ワンちゃんさっきそうしてたね＞Clは部屋の電気を消す。「みてる？」＜暗いよ＞「大丈夫」＜電気つけて下さいよ＞「見てよー」＜嫌だー＞Thが電気をつけてと言うとClがスイッチを入れる。＜ありがと＞ThとClの目が合い互いに微笑む。「良かった？」ミッキーを引きずりながら歩く。＜うん良かった＞「でも大嫌いでしょ」マジックミラーの前で独語が続く。「見てよ見てよー！」＜見てるよ＞ミッキーで犬の様子を再現する。「これ何？」＜ワンちゃん。来ないでって＞

「うん」文字を書いたり、歌ったりする。「お散歩して、犬のお散歩して」＜うん＞妹は2年生でCIは「まだ3年生」で土曜日に学校の先生と遊ぶこと、妹と綾取りと縄飛びをしたこと、クリスマスにはメリークリスマスと言い、お正月にはおめでとうと言ったことを話してくれる。Thが学校へ行かないのか聞くと「学校行ったんだけど」と言う。独語の後、文字を書きThが声に出して読む。＜『おめでとう！母さんとお話しようか。うん。おめでとう！』『おめでとう。上手にかいておめでとう。ごめんね』＞CIはThに寄り添うように紙を覗き込んで聞き、読み終わると嬉しそうに飛び跳ねる。Thがミッキーを取ってと言うとCIは取って来てThに渡す。＜はい、ありがとう＞と言うと「ごめんなさいって言わなきゃいかんの」とミッキーを取りあげる。Thが＜ワンちゃんの所へ行ってごめんなさいって言う？＞と聞くと驚いた表情になる。

母親面接では、ブロックを組み立てては壊すという遊びを繰り返していることが話されていた。

#40、「ヨッシーストーリー」を潰したと言う。「良かったなあ」＜良かったね＞「うん」歌いながら文字を書く。「あのね、暖かくしてよ」甘えた声でThの正面に座る。寒いと言いThが両手を広げるとThの膝の上に頭をのせてうずくまり、Thが背中を撫でてやる。＜温かくなってきた？よしよしよし＞CIは顔を上げる。＜温かくなった？＞「なってない」再びうずくまる。＜なってないの。よしよしよし＞Thが背中を撫でる。「えーん。寒くなっちゃった！」＜寒くなったの。よしよしよし＞Thが背中を撫でる、といったことを繰り返す。

#41、CIはThの手を取って自分の書いた文字を読ませる。Thが歌って欲しいと言うとCIは歌いThが拍手する。Thが学校の先生のことを教えてと言うと「あの一、カメレオン先生」と言い、男の先生かと聞くと「ちがーう！」と叫び走り回る。「雨降りそうなんだ。雨なんだよ。雪じゃないんだ。雪が降ったら暖かいよ」床に寝転んだり、歌ったり、歩き回ったりする。CIは「冷めても焦げて美味しい卵焼き」を描き、Thが食べる。「冷めても焦げて美味しいのー！」＜美味しいよ＞「冷めても焦げて…（笑）ワー。これ…なっちゃったんだよー。えーっと。冷めても」CIはローマ字で「SAMETEMOKOGETEMOOISHII」と書き、Thが＜あはは＞と笑う。CIは書いた文字を「見て」と渡し、Thが声に出して読む。＜『たまごやきたべます。コーヒーのみます。さめてもこげてもおいしい。たこやきはさめてもこげてもおいしいんだよ。すき！すき！すき！』＞Thが足が痺れて動けないと言うとCIがThの足をそっと撫でるかのように触る。ジャンケンをして勝負をCIに聞くと、CIはThを指す。＜終われないね＞再びジャンケンをして聞くと、CIは自分を指す。

終了後、母親の作った卵焼きが焦げていたが美味しかったことを、CIと母親が顔を見合せながら笑って話していた。

#42、CIは自らPr.に向かって走って行く。パペットが準備できておらずCIが怒る。「ねえ…失くすんでしょ。何で失くすのかなあ！失くしちゃだめって言ってるの！なあ！失くしたんでしょ。全部」＜違うのよ！お姉さん一生懸命探したんだけどないのよ＞「うん」＜失くしたん

じゃないのよ。どっかにあるんだけど。探したんだけど見つからなかったのよ> CI はミッキーを抱き寄せてうずくまる。「あの一どっちも嫌いって言ってた？」Th は<ミッキーちゃんだけでごめんね。お姉さん探したんだけどないのよ>と謝る。CI は好きなテレビ番組や歌手の話をし、「あの一NHKで遊びに来るよ」と言う。機嫌良くお喋りしながら「せつげつか」と書く。「でーきた！」<せつげつか。漢字は？>「いや、あはは（笑）読まないんだ」<読めないの？>「うん」独語で歩き回り、叫びながら走り回る。Th が漢字で書こうと言うと「嫌ー。漢字で書かないよ。何で漢字！」Th が漢字で「雪月花」と書く。<書いたよー。見て> CI が戻って来る。「丸つけてないじゃん」と言って自分が平仮名で書いた文字をクレヨンで消してしまう。「あのな、漢字じゃなくて平仮名なんだ」<お姉さんが漢字で書きちゃったんだ。ごめんね> CI は母親から「今日はA（CI）ちゃんと先生（Th）の卒業式」だと言われたことを話してくれる。<卒業式。今日はお姉さんとAくんの卒業式だってこと知ってる？>「知ってるけど。知ってるけど！NHK行って学校あるかもしれないんだよ」<じゃあ、学校へ行くのね？>養護学校は辞めたと言うので、養護学校じゃないけど楽しいことしに学校へ行くのねとTh が言う。「うん」と応える。CI が叫びながら走り回っている間にTh が紙に文字を書く。<できた！読んで！> CI は傍に来て「俺が読みた〜…。『さようなら。ありがとう。おねえさんより』」と読む。Th が拍手するとCI も拍手し、二人で暫く文字を見つめる。CI は持参したCDを大事そうに持ってスキップしながら「これ失くしたらだめだよ。これ俺のCDだから失くさないでよ」と言う。<お家帰って聴くのね>「うん」<今度ね、歌わなきゃいけないもんね>「うん」CI はミッキーを持ったまま歩き回る。最後にジャンケンをして3回目にCI が勝ち二人で退室する。

母親面接では、CI はパニックもなく落ち着いて生活していることが話されていた。

後日、Th はCI の家庭訪問を継続している担任教諭と会い、CI への支援内容を伝えた。Th は個人的事情で担当継続が困難になった。CI の当初の問題は軽減し、学校や医療機関での継続的支援が見込まれた為、別の担当者に引き継ぐことなく一応の終結とした。

Ⅲ．考察

1．遊ぶことの意味

遊戯療法は、子どもの心理・行動的障害の治療に利用され、セラピストの数だけ療法があるとされる。安全な遊戯室という空間では、セラピストによって、そこでの遊びが最大限に保証される（氏原ら編，1999）。子どもの遊びには、感情、欲求、行動、経験、空想、象徴に繋がる内容が豊富に含まれ、遊びは自分自身を表現する自然な媒体となり、そのつどの感情や問題が表出される（高野，1988）。また、遊びはあらゆる典型の子どもについて観察される為、本事例では遊戯療法がCI とTh が様々なことを共に体験する場になり得たと思われる。

先ず、ぬいぐるみやパペットは、CI の内界表出のまさに媒体となった。それは「遊戯療法

の成否を左右するといってもよいほど重要」(高野, 1988)とされる初回に、ミッキー、オオカミ先生、キツネ、カメのお母さんという主要な配役^{キャスト}が出揃ったことから明らかである。「命の宝石」(#1)が吹き込まれたミッキーは、終始、CIを宥め落ち着かせる役割を担った。オオカミ先生は、Thに「命の宝石」をプレゼントされたことによりその存在が認められた。「誕生日ケーキ」(図2)の2本の蠟燭は、ミッキーとオオカミ先生の表明だと思われる。「レンタカー」(図1)は、両者が車に乗って今後もやって来るという良性感情の描出と推される。カメのお母さんもCIと母親の関係を投影する役割を担ったが(#1, 12, 15, 16)、オオカミ先生誕生の意味は大きかったと思われる。「攻撃的な衝動を表出しても、それに対して憎しみや暴力の報復がなされることがない」(Winnicott, 1964)と確信したCIは、叫び、奇声をあげ、吠え、怒鳴り、噛み、殴り、虫の死骸を粉々になるまで叩き潰す(#2)等、激しい攻撃性の発露を繰り返す。鑑(1991)は、怒りの情動は必ずしも否定されるべきものではないと述べている。求めている信頼性、親密性、依存性等が得られないことへの怒りは、直接的にそれらを得ようとする欲求不満の表現であり健全で前向きなものとされる。オオカミ先生は、過去から現在に至るCIの苦痛を具現する役割を担ったのである。十分に処理されなかった経験を象徴的に反復することは、CIにとってカタルシスを達成する為に必然性のある衝動だった。過去をもう一度リアルに生きる経験は、過去の出来事^{エピソード}を別の意味をもって蘇らせ、それは失望を希望に変え得るものである。コップ(1988)は、「その物になりきった感覚」を経験した際に到達した状態が「心を安定させる力」となると述べている。オオカミ先生は、その大役を終えると投棄され(#31)、CIはパペットを「おもちゃ」(#32)と言い放つようになる。

次に、オオカミ先生が担ったものをCIは「ウンチ弁当」(図9)として描出する。それは匂いという生々しさを含むものである(#19)。内海(1993)は、絵画では具象の向こうに抽象を表現すると述べている。CIは描いたものをThに食べるよう要求した。それは、「自分はどうなのにおいしいか、他者にとって自分はどのような価値をもつのか、他者によって自分はどんなふう to 受け取られているのか」といった「自己の存在価値を確認しようとする強い欲求」(新宮, 2000)と考えられた。ThはCIが描くものを食べた(#19, 21)。CIが「うんこ」と称する耳垢も食べた(#25)。CIは、それまでは叩き潰したり押し潰そうとした虫の死骸を「ペット」として羽ばたかせようとした(#29)。そして、描画は文字へと変化していった(#32, 37~42)。

このように、CIはぬいぐるみとパペットを自在に操り、絵を自由に描いた。それらが象徴遊びとして行われていたとするならば、CIは遊びの中で対人関係や社会的認識を深めていた可能性が考えられる。また、「描くという営みが生じるためには、“表したい”という内的欲求があり、それを可能にする表現能力、表現技法がいる」(村瀬, 1993)。つまり、CIは自閉的ファンタジーに留まらない想像機能、創造力やそれを表現する能力を持っていた可能性が考えられる。これらの能力は、直接的経験や身体感覚を通じた認識の仕方から、いったん経験を

取り込んで対象を操作するという間接的思考を可能にし、他者を自分とは異なる思考をもつ人として認識する能力の基礎となるものである (Frith, 1991)。従って、たとえ障害による何らかの限界があるのだとしても、CI には他者とのコミュニケーションをさらに深める豊かな感情を有することが推察される。遊戯療法の間では、それらが自然な文脈で観察可能となったと思われる。

2. 身体を通した関わりの中で

子どもは、身体通して世界を感じ取り (中村, 1988)、「身体全体で世界と共生している」 (立川, 1985)。従って、遊びも身体体験に根ざしたものであり、そこに子どもが遊ぶことの意味があるのだと考える。

遊戯療法では、キツネ (Th) が CI の身体に触れたり (# 6, 36)、身体を食べたり (# 6)、頬にキスしたり (# 11) した。Th は CI の傍らに寝転んだり (# 3)、抱っこしたり (# 7, 8, 11, 17, 23)、撫でてやったり (# 35, 40)、くすぐったりした (# 30)。しかし、初回から、CI と Th が互いのパペットで抱き合うように身体を合わせた (# 1, 8, 11, 12, 15, 16) ことから、CI に同調性が感じられないわけではなかった。カメのお母さん (CI) はキツネ (Th) の尻尾を食べ (# 15)、CI の方から Th の膝の上に手を置いたり (# 6)、足をのせたり (# 15)、もたれかかって全身の力を抜いたり (# 6 ~ 8)、腕を組んで来たり (# 8)、顔を見たり (# 6, 11)、甘えたり (# 20, 23, 28, 40)、放屁したりした (# 3, 28)。CI は、自身の身体を通して心地良い安心感を再確認していったのだと思われる。

播磨 (2008) は、発達を「周りとの関係の変化という点からもとらえていくことが大切」としている。母親は CI に対する内心を告白した (# 21, 23)。結婚年齢や第一子と二子の年齢差から無計画に二児の母親になってしまった可能性は否定できず、CI に対してあったとされる父親の暴言暴力が CI に止まっていたかどうかとも定かではない。従って、出生後から母子間の社会的相互交渉が十分には行われていなかったことが推される。また、母性的愛撫^{マザーリング}の欠如は心身の発達障害を生ずるとされているが、CI が母親に身体を愛撫された体験が乏しかった可能性も否めない。しかし、「自分を変えることが困難であることを知っている親は、子どもが遊戯療法によって変化」 (高野, 1988) してくると、それに勇気づけられ今までとは違う関わり方をするようになる (# 25, 31, 41)。母親の登校刺激 (# 1, 12) や CI の固執行動への強制的制止 (# 1, 7, 12) は減退した。

北山 (1988) は、身体体験に根ざした自体愛的基盤がない子どもは、母親に受け容れられるべきものが受け容れられずに「気持ちの悪いもの」として子どもの中に留まっている状態であると述べている。CI はそれを「食べ過ぎ」と表現したのかもしれない (# 16)。CI は「気持ちの悪いもの」を大便として母親に贈る (# 31)。母親が作った「おにぎり」を Th と一緒に食べ、「まずい緑茶」はパペット達と飲む (# 33)。CI は、「自分に合うように噛みくだいて消化

してゆける」(北山, 1988)、そんな母親との関係を「原初的な他者理解のレベル」(市川ら, 1977)で再構築していたのかもしれない。Thは、「ネズミ」がどうしても「オオカミ」に見え何度も呼び間違えた(#1)。しかし、そこで「ネズミのオオカミ先生」とした譲歩は興味深い。そのネーミングからは自分を主張しつつ他者を受け入れる宥恕能力が推察される。CIはその高次精神機能を再び「冷めても焦げて美味しい卵焼き」(#41)で示唆し、母親と和解したのである。

身体は「常に家族との交わりとして形成される」(北山, 1988)。CIに対する身体を通した関わりが効を奏したとするならば、それは偏に、幼いCIと母親に、“見る—見られる”、“触れる—触れられる”、“抱く—抱かれる”といった“能動—受動のやりとり”が存在していたからではないだろうか。それは十分ではなく、CIにとっては不満足だったかもしれない。あるいはCIの方に母親が期待するほどの反応レパートリーが乏しかったのかもしれない。しかしたとえそうだったとしても、乳児期に基本的信頼感が全く育まれずに、CIがThの表情を見るような行動(#6, 11)は起こり得るのだろうか。Thは眼前のCIをあるがままに見て、身体ごと受け容れるよう試みた。子どもが「常に何かに向かう構造」(村瀬, 1983)の中で行為しているのだとするならば、たとえCIの言動の意味がすぐに理解できずとも、一緒に“現在を遊ぶ”ことが重要だと思った。羽下(1994)は、万能感をコントロールするには「自分の考えること、為すことは自分にとって無条件に正しい」という地点に一度辿り着くことが必要だと述べている。このようなThの存在は、これまで周囲に否定されやすく理解され難かったCIにとって、コミュニケーション能力を促進する契機になったと思われる。またそこには、CIの素地能力や育まれていた親密性が大きく関与しているように思われる。従って、Thが成し得たことは安全な場と心地良い体験の提供であり、CIはそこで「深い安心感」(村瀬, 2006)を回復していったのだと考えられる。

3. 障害の把捉とは

Thは「確か」(杉山, 2009)な支援ができたのだろうか。

CIには、独り遊び、独語や奇声を発する等の自閉症的症状や行動が観察された(#2~4, 7, 9, 13, 17, 22, 27, 30)。小林(2002)は、自閉症圏障害の病態を関係障害とし、対人関係における「情動的コミュニケーション」が上手く成立し難い状態としている。自閉症圏障害の子どもはスキンシップを回避するが、背後に強い接近欲求を同時に有する為、そのコミュニケーションは複雑な様相を呈するとされる。彼らは、「関係がとれない」のでもなく、「対人関係に無関心」でもないのである(村瀬, 2006)。小倉ら(2010)も発達障害の子どもは関係を求めているとしている。

障害は個人の素因と環境の相互作用によるものであり、環境にある程度は依存するが、環境に柔軟に対応し適応的な生活を送る人が存在しても不思議ではない(川村ら, 2010)。子ども

の場合、加齢によって障害による不都合が変化・軽減していく可能性もある（播磨，2008）。杉山（2009）は、「生活面で問題が生じているか」がその診断の基準になるとする。子どもは一人ひとり成長の度合いも性格も違う。「診断名は子どもの特性を知るためと捉え」、特性に応じた個別的な支援により生活が問題なく過ごせれば障害と見なす必要はないという。

昇地（1985）は、「遊べる子どもは、ほどよい安定した環境を与えられると、その子なりの生き方を見つけていき、やがて世間の人に十分歓迎され、望まれる人になる力のあることを示している」と述べている。遊びの場は、CIにとってわかり易い「プリミティブな関係」（神田橋，1995）を構築できる場であったのだと思われる。CIのような子どもは、このような場において、もっと理解されるべきではないのだろうか。

まず、CIには高い会話能力が観察された。CIは言葉で自分の事情を説明してThを納得させようとした（＃14）。はにかんだり（＃22）、恥ずかしがる（＃38）という微妙な感情を表出し、それらは明確に言語化されることもあった（＃29，38）。特に注目されるべき点は、会話で自閉症児が殆ど使用しないとされる終助詞を頻繁に使用したことである（＃1，3，5，8，11，14～16，23，25，26，30，31～33，35～42）。終助詞は会話に微妙なニュアンスを加え滑らかにし、話し手の聞き手に対する態度や感情を表す機能を持ち対人的性格が強い語とされている。

次に、CIにはThの模倣が観察された。ThはCIに謝ることを厭わなかったが（＃1，38，42）、CIは即座にそれを取り入れた（＃3，12，15，21，27）。玩具の片付けも、Thがそうしていたように一人で行うようになった（＃11，14～17，31，32，34，37）。ジャンケンでThが負け、おどけて背後にひっくり返ると（＃21）、CIも必ずそうした（＃25，38）。また、ThがCIの身体を撫でたように、Thの頭や足をそっと撫でてくれたのである（＃32，41）。

また、CIには共同遊びの能力が随所に観察された。ファーファ（CI）がキツネ（Th）と一緒に泣いたり（＃15）、CIとThがかけ合いで歌ったり（＃16）、笑い転げたり（＃26）、声を合わせてジャンケンしたり（＃26，27，28）、力を合わせてスケボーをしたり（＃28）、あなたがやりなさいよと言いつたりした（＃30）。CIが書いた文字はThが声に出して読み（＃39）、CIはThと目が合うと互いに微笑んだ（＃39）。

このような中で終始観られたCIとThの“駆け引き”に至っては（＃1，5，10，12，13，16，17，29，30～32，36，39）、CIの社会性の障害（対人相互交渉の質的障害）とは一体何なのかを考えさせられる。

さらに、CIはPr.への入室に消極的で（＃8，20，24，27，31，34～38）、退室時間を早めるよう要求した（＃9，10，11，13，14～17，22，25，31，36，38）。その理由は様々だったが、そこには対象恒常性の未達成からくる情緒的不安定が推測される。しかし、徐々に入室に積極的になり（＃25，26，29，42）、退室を引き延ばすようになる（＃33，35）。これは、支援者の立場からは遊戯療法の成果と一方的に考えられがちである。しかし、見捨てられ不安に駆

られていたかもしれない中で遊戯療法に通い続けたCI「本人のがんばり」(杉山, 2009)があり、『努力』の現れ」(村瀬, 2006)であったことを忘れてはならないのではないだろうか。筆者は、そこにはCIの「命に満ちた存在としての“からだ”」の「主体としての努力」(成瀬, 2006)が、「確か」(杉山, 2009)に存在していたのだと考えるのである。

注

- 1) 近年、障害の「害」という字に問題があるとの指摘から表記についての議論がある。自治体では「障がい者・障がい児」あるいは「障がいのある人(方)」への変更の動きが広がっている。しかし、未だ表現変更に関しては賛否両論があり、本論文では従来通りの表記とする。
- 2) <http://www.mhlw.go.jp/topics/2005/04/tp0412-1d.html>
- 3) http://www.pref.shiga.jp/edu/content/06_education/tokubetsu_shien/sassi/h20shiganotokushi/025monka17-1178.pdf

付記

本論文は日本心理臨床学会第19回大会での口頭発表を加筆修正したものです。本事例において御指導を賜りました兵庫教育大学富永良喜教授に御礼申し上げます。また、未熟なセラピストと一緒に遊んでくれたクライアントとご家族に心から感謝を申し上げます。

文献

- American Psychiatric Association (2003): Quick Reference to the Diagnostic Criteria from DSM-IV-TR 高橋三郎・大野裕・染矢俊幸(訳)(2007):新訂版 DSM-IV-TR 精神疾患の分類と診断の手引き 医学書院
- Frith, Uta (1991): Autism and Asperger syndrome. Cambridge University Press 富田真紀(訳)(1996): マーガレット・デューイ 6. アスペルガー症候群とともに生きる 自閉症とアスペルガー症候群 東京書籍, 317-360
- 羽下大信(1994): マージナル・マン(周辺人)という感覚 心理臨床7(1), 23-30
- 播磨俊子(2008): 第5章 発達障害児の発達とその臨床心理学的知見 鶴光代編 発達障害児への心理的援助, 68-77 金剛出版
- 市川浩・山崎賞選考委員会(1977): 身体現象学 河出書房新社
- 神田橋條治(1995): 治療のころ5, 花クリニック神田橋研究会
- 川村昌代・杉山登志郎(2010): 発達精神病理学的視点からみた広汎性発達障害 田中康雄編 発達障害の理解と支援を考える 臨床心理学増刊第2号 金剛出版, 25-30
- 小林隆児(2002): 自閉症の関係障害臨床—母と子の間を治療する— ミネルヴァ書房
- 小林利宣編(1995): 教育臨床 心理学中辞典 北大路書房
- 高野清純(1988): プレイセラピー 日本文化科学社
- 黒坂三和子編(1988): 子どもの想像力と創造性を育む 思索社
- コップ, イデイス(1988): 子供時代における想像力のエコロジー 黒坂三和子編 子どもの想像力と創造性を育む 思索社, 67-93
- 北山修(1988): 心の消化と排出 創元社
- 三木安正監修(1980): 新版 S-M社会生活能力検査 日本文化科学社
- 村瀬嘉代子(1993): 臨床描画研究Ⅶ 金剛出版

村瀬学（1983）：理解のおくれの本質 大和書房

村瀬学（2006）：自閉症 ちくま新書

中村雄二郎（1988）：生命感覚の知 黒坂三和子編 子どもの想像力と創造性を育む 思索社，11-29

成瀬悟策（2006）：からだところ—身体性の臨床心理 日本の心理臨床3 誠信書房

日本臨床心理（2006）：学会編（1993）：心理テスト・その虚構と現実 現代書館

小倉清・村瀬嘉代子・田中康雄（2010）：鼎談 発達障害の現在 田中康雄編 発達障害の理解と支援
を考える 臨床心理学増刊第2号 金剛出版，2-15

新宮一成（2000）：夢分析 岩波新書

杉山登志郎・辻井正次編（1999）：高機能広汎性発達障害 ブレーン出版

杉山登志郎監修（2009）：子どもの発達障害と情緒障害 講談社

昇地三郎（1985）：精神薄弱児の治療教育 精神薄弱児研究，77，2-3

立川昭二編（1985）：癒しのトボス 駸々堂

鏑幹八郎（1991）：試行カウンセリング 誠信書房

氏原寛ら編（1999）：カウンセリング辞典 ミネルヴァ書房

内海久子（1993）：臨床描画研究Ⅷ 金剛出版

Winnicott. D. W（1964）：The Child, the family, and Outside World Peuguin Books Ltd., Harmondworth,
Middlesex, England.：猪股丈二（訳）（1986）：子どもはなぜあそぶの 星和書店

World Health Organization（2008）：The ICD-10 Classification of Mental and Behavioural Disorders WHO
Diagnostic criteria for research：中根允文・岡崎裕士・藤原妙子・中根秀之・針間博彦（訳）（2008）：
新訂版 ICD-10 精神および行動の障害 DCR 研究用診断基準 医学書院

『読売新聞』夕刊，2010年10月19日